

今からちょうど一ヶ月前の学園の創立式典で、姜尚中先生が「悩む力」と題して講演をしてくださいました。私はつねに何か考え事をしていることが多く、自分が恵泉生活でしてきた色々な悩み事を振り返ってみたら、姜先生のお話にとっても共感ができました。

今回の感話では、私が今まで悩んだことをいくつかあげて、それらが自分にどのような影響を与えてたかを話したいです。

まずはじめに話すことは、今まで何度か感話で取り上げたものなので覚えている6年生や先生方もいらっしゃるかもしれません。私が恵泉に入学して、まず気にかけるようになったことは、自分がまわりとは違う外国人であるということでした。私は普通のリトアニア人として日本で生まれ、日本とリトアニアを行き帰りしながら、ほとんどの時間を日本で過ごしてきました。小学校のとき自分がまわりとの違いを大して気にしていなかったように思いますが、恵泉に入学して、新しい環境に入ったそのときに孤立感を覚えました。私が中学一年生で初めて書いた感話で、「これからは日本人らしく生きていきたいです」と述べたら、担任の先生が、日本人らしくいる必要はなく自分のままでいればいいとってくださいたことを今でも鮮明に覚えています。まわりと違うというのは外見だけではなく、自分の国らしい考え方がときには通用しないということもありました。そのため友達と対立しては国が違うのだから、と心の中で言い訳をし、やはり友達に合わせてやっていくしかない諦めの気持ちが少々ありました。4年生になると自然と違いを気にする気持ちが薄れ、まわりと違うことがかえって自分らしくて良いことだと自信を持ち始めました。そこで再び感話を書いて喜びを表現したら、感話を読まれた先生方からは変わったねとたくさん声をかけてもらいました。

しかし、なぜ私が感話でこの内容を3度目に取り上げたのかというと、自分の中で再び反発の気持ちが生まれたからです。一年生の聖書科の授業で先生が、私たちは自分のアイデンティティーがわからなくなる時期があるとお話をされたように、私は昨年あたりから自分がいったいどこの国に属すのかと自分を問うようになりました。日本にいる私は外国人、しかしヨーロッパに帰ってもまた異国の地にいるような気持ちになることがあるからです。リトアニアで生活することにほとんど不便はありませんが、今度は無意識にやってしまう日本の慣習が通用しないと気づいたりすると、自分にリトアニアらしさが欠けてるなど寂しく思うことがあります。私にはもう一度ヨーロッパに帰って、自分探しをしたい思いがあります。

私が今年最も時間をかけて悩んだのは、進路のことでした。今年の夏は久しぶりにリトアニアに帰ることができ、やはり母国に帰ると自分が本当に何がしたいのかを冷静になって考えることが出来ました。とくに今回は自分がこれからどうしていきたいのか、将来は

どんなことをしたいのか、どんな自分になりたいのか、ひたすら考え続けた夏でした。やりたいことは色々あるけれど、自分の決断が人生を大きく変えると思うと不安の一言で、とにかく納得のいく選択をしたいと思っていました。

恵泉を卒業したらヨーロッパに帰ることは決めていても、もっと具体的な目標はどうするのかという悩みは長く続きました。勉強したいことはある、けれどイメージがわからない、勉強の先に何かあるのか想像つかない、今決めると全てが決まってしまう、と悩みはつきませんでした。リトアニアで家族や友人と相談を続けても決断はできず、日本に持ち越すことになりました。ここで一つ面白い話、飛行機で隣になった初対面の人にも相談したら、**what should I be** に対する彼の答えは **be happy** と単純で素敵な答えでした。日本では学科と就職が必ずしも直結しないといわれるうえ、自分が一番興味あるものをそのまま大学で勉強すればいいと言われる。それに対してヨーロッパでは、大学の先にあるものが重視されるように思われます。大人になったときの生活に満足できるか考えなければならないことに気づかされ、自分がやっていて楽しいと思うもの、そして将来生かせそうなものは何だろうかと私は考え続けることになりました。

ここで、みなさんは **Work to live, Not live to work.** という言い回しを聞いたことがあるでしょうか。これは私の好きな言葉の一つですが、夏休みヨーロッパに帰って改めて大事にしなければならない言葉だと考えさせられました。進路を相談した相手から必ず返ってきた答えは、「将来の仕事は自分がやっていて楽しいと思えるものになるように」というものでした。仕事が生活の一部の楽しみとなって、「働くために生きる」のではなく、「生きるために働く」ことができるようにすることが大事だと言われました。

人からのアドバイスをもとによく考え、学校が始まってからは何人かの先生方と相談して考えた結果、やってみないとわからないという言葉に後押しされてようやく具体的に方向が決められました。決断がでるまで随分長い間悩みましたが、今では日に日に学びたいこともはっきりして思いも強くなり、時間をかけて納得して出した決断に満足しています。そしてこれからが楽しみです。自分のやりたいことがわかっている人もいれば、私のように時間が必要な人もいます。何かと決断を急がされる毎日ですが、進路に関しては時間が許す限り悩んでもいいものだと私は思っています。はじめは漠然とでも、自問自答を繰り返していけばいいと思います。

最後に、私が恵泉で過ごしてきた中で最も葛藤をつづけた悩みを話そうと思います。これは私が3年前から、卒業する前に一度感話を通して皆さんに伝えかけたことでもあります。今から3年前の夏、私が中学3年生の8月にお母さんが乳がんで亡くなりました。しかしここで私が皆に伝えたいのはその話ではなく、私がした後悔が悩みが変わって、自分をどう変えたかということです。そしてその後悔をみんなに知ってもらうことでいつか皆さんのためになってほしいと思います。先ほど言った、悩みが変わった後悔とは、危篤のときも亡くなったときも、自分の生活を自分で止めることができなかったことです。自分が落ち着くべきだった危篤のころ、クラブの夏の大会3週間前で、私はそのとき何事も起

こっていないかのように自分自身を錯覚させて日常生活を続けてしまいました。これは大きな後悔です。もし皆さんが誰かと永遠の別れをしなければならなくなった時は、やっていること全てを止めてしっかり別れてきてほしいと思います。当たり前のように聞こえるかもしれませんが、意外と現実から逃げてきようならを言わないこともできてしまうのです。私は悲しむべき時期にとりあえず時が過ぎるのを待ってしまいました。こうして何事もないかのように過ごして何がおこるかという、この先ずっとそのままでいてしまいます。今までどおり、近くにいるかと思いきや、探してもどこにもいなく、自分がどこに頼ればいいのか正直わからない、けれど未だに何もおこっていないから大丈夫 というなんとも複雑な気持ちが続きます。引きずると苦しいので、皆さんに同じ後悔をしてもらわないために、しっかり別れてきてほしいと思います。自分の役割を引き受けてくれる人はたくさんいるので、安心して現実と向き合っているはずで、自分の気持ちの対処や、家族のあり方がわからなくなったりと、心配事はつきなくなるものです。自分が苦しいときに今と同じ時間に似た立場にある人を見つけたいと思うと思います。他の人に気づいてもらえないもどかしさをどこにぶちまけたらいいのかと思う人もいるかもしれません。この感話を聞いてくれている人の中で、もしも今そのような人がいて、私と共有できたら私も嬉しく思います。

自分が自分の力で進んでいかなければならないと内気になって悩んでいるのが無意味だと、私は何度も言われてしまったことがあります。しかし私はそうは思いません。何もできない時間というのはそのときが無駄に見えても、あとから振り返れば、そのとき心の中にあつた悲しみや怒り、喜びや感謝の思いが私の心を豊かにしてくれたと思っています。

先月、現代文の授業で読んだ文章の中で心に残る箇所があります。

教養とは、いわゆる物知りという意味の教養ではなくて、内面的な精神生活のことをいう。そして文化的な精神活動では休止とは必ずしも怠惰ではなく、価値の蓄積によってそれ自体生きた意味を持つ、というのです。姜尚中先生も講演で、悩む力が人間力や生きる力に変わるとお話をされていました。だからこそ悩むときは中途半端に辞めてはならず、突き抜けることが大事だそうです。私もとても共感しています。自分と周りとの関係や、進路のこと、心にあいた穴を埋めるときも、私はじっくり時間をかけて向き合ってきました。先ほども言ったように心が豊かになったのを感じただけでなく、自分に自信が持てました。

今私のまわりには応援してくれる人がたくさんいて、私のことを思ってお祈りをしてくれる人がいて、私はたくさんの方の愛情に囲まれています。私を元気にしてくれる場所があり、私の話を聞いてくれる理解者がいることにとっても感謝しています。悩みに陥ってどうにもならないときはとても苦しいですが、また元気になった時間はものすごく楽しいです。波があるからこそ明るいときの自分が生きていることに喜びを感じることができると思います。私たちが生きるのは、人が人と話して楽しむため、自分を応援して助けてくれる人に応えて感謝するため、そして自分がやることを心から楽しむためだと私は信じています。自分自身に関わる小さな悩みも大きな悩みも、時間が許す限り自分で考え抜いて、

その先にあるものを楽しみにしていきたいものです。